

『恋する死女』を読む — 妖しい恋と蠱惑の幻影 —

桑 原 隆 行

愛から遙か遠く離れて生きる人は
寄せては返す波と同じ どこへも逃げぬ囚われ人
愛から遙か遠く離れて生きる時は
時計を海に捨てに行こう 永遠のリフレインに
(中島みゆき「愛から遠く離れて」)

今回の文学講座を依頼された時、即座にテオフィル・ゴーチエの『恋する死女』が頭に浮かびました。それには、偶然の働きが影響していたようです。元々、ゴーチエの作品を読むのは好きでした。でも、最近は他の作家を読むことが多く、ゴーチエ作品に接する機会はなくなっていました。ところが、授業で使うことになったフランス19世紀文学のアンソロジーの中に、『恋する死女』が入っていたのです。久しぶりの懐かしい再会でした。詩的で耽美的な文体の魅力は相変わらずでした。この魅力を共有してもらいたくて、授業でも読みましたし、定期試験の問題にも出しました。再読の印象がまだ鮮明な時に、偶然、講座の話があったのです。さらに言えば、アンソロジーは当初予定していたものとは別のテキストで、間違っ入荷したものでした。偶然が、昔愛した女性に邂逅させるように、『恋する死女』を再発見させることになったのです。そして、偶然が、昔飽くことなく愛でた女性の肉体の細部を思い出させるように、作品を読み直す機会を与えてくれたのです。

ぼくは偶然が好きなので、よく今のように偶然という言葉を使ってしまいます。癖です。ウディ・アレンの『マッチポイント』という映画では人生が偶然そのものに譬えられていました。「人生の出来事は偶然によって決まる。テニスボールがネットに当たって向こう側に落ちれば勝ち、こちら側なら負け。これが運。」ところで、『美しき運命の傷痕』というフランス映画（原題は*L'Enfer*、「地獄」という意味です）があります。エマニュエル・ベアール、マリー・ジラン、キャロル・ブーケといった女優さんが出ている映画です。その中で、一人の美しい女子学生にストーカーのように付きまとわれ愛される大学教授が、講義で運命と偶然について話すシーンがあります。彼によれば、現代人は運命という言葉の重みを背負いきれなくて、代わりに偶然という言葉を発明して、気軽に使っている。ただし、私は（というのは映画の中のその教授ですが）運命という方が好きだ。運命というのは約束された何かで、偶然よりは美しく思えるからだ。確かこんな感じの事を言っていました。偶然という言葉気軽に使う側に属するぼくには、妙に印象的だったのを覚えています。

「運命とは約束された何か」、素敵なお言葉ですね。でも、その内分かかるかもしれませんが、ぼくは運命という言葉も簡単によく口に出してしまうのです。運命と偶然をめぐる哲学談義をするつもりも能力もありませんし、ぼくには運命でも偶然でも好ましい、どちらも歓迎です。こうして好きな女性ではなかった、好きな小説に再会できて、それについてお話する機会に恵まれたのですから。この運命の、あるいは偶然の導きの糸に感謝します。どうも最初からわき道に逸れていってしまいますね。こういう逸脱は今からのお話の中で何度か不意に生じる予感がします。散歩の途中の寄り道や迂回のように生じるだろうと予告しておきます。最後に目的地につけばいいわけだし、思いもかけない地点へと逸れたまま終わることになっても、そういう偶然も楽しいではありませんか。

まずは、『恋する死女』の始めと終わりに注目しましょう。「兄弟、君はわしが恋をしたことがあるかと云うのだね、それはある。が、わしの話は、妙な恐ろしい話で、わしもとって六十六になるが、今でさえ成るべく、その記憶の灰を掻き廻さないようにしているのだ。」こういう書き出しです。皆さんに予め読んでおいてもらったのは題名が『クラリモンド』になっていたはずですが、ミステリーのように最後まで訳者が誰かを伏せたまま進めていこうかとも思ったのですが、最初から正体を明かしておきます。翻訳者は芥川龍之介で、英訳本を用いて訳したのだろうと推測されています。(古今東西テーマ別文学全集書物の王国第12巻『吸血鬼』、国書刊行会を参照してください。以後の引用は、この芥川龍之介の訳に拠っています。フランス語版によってぼくが一部変更を施す場合は、その旨を明記することにします。フランス語版はThéophile Gautier, *Récits fantastiques*, Flammarion, 1981. を使用します。芥川が利用したと想像されている英訳本をぼくは持っていないので、以後、該当部分を逐一英語版で確認することはできません。ですから、便宜上、芥川龍之介の裁量、工夫、巧妙、省略、言い換えと考えて話を進めることにします。) さて、兄弟(フランス語版ではfrère)という呼びかけの言葉が語り手と聞き手の二人が共に教会のような同じ宗教組織の人間であることを教えています。事実、すぐに語り手が司祭だったことが明示されています。

続きをもう少し引用しましょう。「君には、わしは何一つ分け隔てをしないが、話が話だけに、わしより経験の浅い人に話しをするのは、実はどうかとも思っている。何しろわしの話の顛末は、余り不思議なので、わしとその事件に現在関係していたとは自分ながらわしにも殆ど信じる事が出来ぬ。わしは三年以上、最も不思議な、最も奇怪な幻惑の犠牲になっていたのである。」(「最も」という風に強調されていますが、フランス語版にその最上級に相当する言葉はありません。それと、「話が話だけに・・・とも思っている」の部分は巧く工夫してありますね。フランス語版では《mais je ne ferais pas à une âme moins éprouvée un pareil récit.》。ぼくは芥川のように条件法を巧みに料理してみせることはできないと断言できます。脱帽です。) 妖しく怪奇な事件を体験した当事者が、自らそれを語っていくことが分かります。

最後はどうなっていたでしょう。「兄弟よ、これがわしの若い時の話なのだ。忘れても女の顔は見ぬがいい。そして外へ出る時には、何時でも視線を地におとして歩くがいい。何故と云えば、如何に信心ぶかい、慎みぶかい人間でも、一瞬間の誤が、永遠を失わせるのは容易だからである。」

（原文では「誤」という言葉はなく、『il suffit d'une minute pour...』となっています。）面妖なる惑溺状態をからくも脱して、その後、神と共に歩む敬虔で清廉な人生を生きてきた司祭が、若輩に忠告を与える形で終わっています。

始めと終わりは、この幻想小説の枠組みのようなものです。『恋する死女』は一人称で語られ、語り手が登場人物と同一であり、そして自らが語る出来事の当事者になっています。皆さんが知っの通り、ロミュアルドという司祭が体験した事件であり、それを自ら語っているわけです。幻想小説では、こういう場合特に、語り手が信用のおける人物であること、読者が語り手を信頼してその不思議な妖しい物語を読んでいく気になるように配慮する必要があります。この作品では、見てきたように始めと終わりの枠がその役割を見事に果たしています。悪魔の誘惑から逃れて、神の道に戻った誠実で信仰篤い司祭という設定は、信頼性の保証、アリバイなのです。立派な篤信の人の話は信頼するに充分だからです。さらに、己の体験を踏まえて、教訓めいた勧めで締めくくっているのですから、なおさらです。しかし、言うまでもありませんが、枠は枠でしかないのですし、終わりがどれほど教訓めいていても、肝心なのは、その間で語られる恋と快樂の物語なのです。作者ゴーチエが関心を持って描いてみせたいのも、読者が秘密めいた気持ちで読みたいのもクラリモンとロミュアルドの妖しい恋の物語、欲望と快樂の夢なのです。

枠ということで、思い出したことがあるので少し話します。フランス19世紀の作家たちは多くがドイツ人作家ホフマンの影響を受けています。ネルヴァルしかり、ジョルジュ・サンドも言うに及ばずです。ゴーチエは中でも、ホフマンの幻想物語に最も魅了され影響された一人です。ゴーチエはホフマンの物語構成、語り、テーマ、手法などを取り込み、自分のものに作り替え、独自の耽美的幻想小説を書き続けることとなります。ゴーチエはホフマンの死亡年1822年の11年前の1811年生まれです。『恋する死女』の司祭は齢六十六にして、過去の恋を回想していますけれど、ゴーチエは1872年に六十一歳で亡くなっています。

枠組みの話をしようとしていたのでしたね。『恋する死女』という題名が、ぼくの関心をホフマンの『婚約した幽霊』（原題は『不思議な訪問者』）に向けることになりました。この作品では、枠が単なる枠を越えて、物語＝枠（le récit-cadre）を成して展開しており、その一方で物語の中の物語（le récit dans le récit）という構成も見られます。ドアが開けられることが、別のレベルの物語への移行・変化の手段として機能しています。これはほんの一例ですが、ホフマンの幻想小説では様々な物語レベルが混在し、語りの技法が試みられていて、小説というものの多彩な可能性が提示されています。これは、ゴーチエの幻想小説の場合も同じです。

さあ、枠の中身、肝心の恋物語を見ることにしましょう。芥川の訳では、先程引用した部分の最後「犠牲になっていたのである」の後に段落を替えて、次のように続いています。「わしはみじめな田舎の僧侶をしていたが、毎夜、夢には——わしはそれがことごと悉く夢ならんことを祈っているが——最も五慾に染んだ、呪うのろ可き生活を、云わばサルダナルパルスの生活を送っていた。」（芥川は英訳がそうだったのでそれに忠実に段落を替えているのかもしれませんが、フランス語版では段

落は替わっておらず、そのまま続いています。現実と夢との境目を曖昧にして、余り明確にしない方が幻想性を維持するには有効なので、ぼくとしては杵の文章にそのままさりげなく続くフランス語版の方がいい気がします。最初に言っておくと、全体的に芥川の訳では、フランス語版で続いている部分が別の段落にされたりしている場合が多く見られます。逆に、フランス語版で段落に切られている部分がそのまま直前の文章とつなげられている場合もあります。果たして、これは英語版がそうなっているのか、芥川の何らかの意図が働いているのか。) サルダナパルス、フランス語ではサルダナバルという伝説の人物名が出てきます。これは淫蕩で享乐的な人間の典型、象徴としてここに置かれていて、読者に刺激的な蠱惑と快樂の物語を予感させ、予告しています。

この後に続いて、「わしは恋をした」で新しい段落の始まりになっている直前までの部分はどういう働きを果たしているのでしょうか。「思えばわしの昼の生活は、長い間、全く性質の異った夜の生活と、織り交ぜられていたのである。」このように昼の信仰生活と夜の快樂生活に引き裂かれた二重生活が告白されています。それから、歡樂と享樂へ誘惑する女の姿をした悪魔の魔手から逃れることができた安堵と喜びも表明されています。「この夢遊病者のような生活の或場面とか或語^{ことば}とかの回想は、未だにわしの心に残っていて、わしはどうしてもそれを、わしの記憶から拭い去ることが出来ない。」その時の墮落を免れて清廉な人生を生きてきた余裕からか、このように、快樂生活の忘れられない記憶を懐かしむ口物も感じられます。以上、この部分は、語り手が経験した不思議な出来事、これから語り手が語ることになる詳細の要約として読むことができます。さらには、語り手の誠実と謙虚が尚一層印象付けられるという点と、ここまでが最初の一つ目の段落であるという意味では、先程話した杵組みとも言えるでしょう。

ある研究者(マルク・エジェルダンジェ)は、ゴーチエの幻想小説のテーマを八つに分類しています(フラマリオン版上掲書を参照のこと)。それを参考に、説明させてもらおうと、『恋する死女』ではその内の五つのテーマが扱われています。一つは「欲望の投影や精神の動き」、そして以下、「夢や幻覚性の幻影」、「分身」、「欲望の作用による死女の蘇り」、「吸血行為」です。すでにお読みになった皆さんには分かっていると思いますが、これらのテーマはバラバラに無関係にあるのではありません。巧みに作品の中で混じり合い、氷のように熱い幻想の恋物語を作り出しているのです。

必ずしも今紹介した順序通りにはいかないかもしれませんが、途中で別の話に寄り道することがあるかもしれませんが、五つのテーマに則して物語を見ていきます。その前に指摘しておきたいことがあります。今取り上げているゴーチエの『恋する死女』を芥川龍之介が訳しているように、特に、作家が他の作家の作品を訳す場合のことです。当然のことながら、元々自分が関心を持っているテーマと共通の物を読み取るとか、無意識で不分明な関心事に光を当てられ刺激を受けるとか、結局のところ似通った心性を感じ取って、興味を惹かれ、親近感を覚えるからだと推測できますよね。芥川が『奉教人の死』、『るしへる』、『きりしとほろ上人伝』、『黒衣聖母』、『南京の基督』等々のキリシタン物と呼ばれる作品を書いていることを思い出してください。ゴーチエの『恋する死女』

の語り手にして登場人物は宗門に仕える司祭です。それも、欲望と幻影に翻弄される司祭です。芥川がこの作品に惹かれたのは当然の流れです。ゴーチエ同様、夢や幻覚、分身などは芥川にも親しいテーマです。さらに、ゴーチエの他の幻想小説に範囲を広げて見ていけば、この二人の作家の間にもっと多くの共通点を指摘できると予想できます。これは、谷崎潤一郎の場合も同じで、彼にも幻想小説の様々なテーマとの親近性を見て取ることができます。谷崎に関しては、追々、具体的に引用しながら例証していくこととなりますので、お楽しみに。

『恋する死女』に話を戻しましょう。まずは「欲望の投影や精神の動き」のテーマを読み取ることができます。語り手のロミュアルドは早くから自分の天職が司祭だと感じて、二十四までキリスト教の修業だけに励んできたと言っています。その結果、世間知らずであるとの自覚もあります。次の引用部分に注目してください。「わしの世界は大学と研究室との壁に限られていたのである。尤も『女』と云う者があると云う事は、漠然と知っていたが、わしはわしの思想がこの様な題目の上^{もつと}に止る事を許さなかったので、わしは全く純真無垢な生活をつづけて来た。」そして、叙階式の日がやってきます。「わしは一夜を祈禱^{きとう}に明した後なので、殆ど恍惚^{こうこつ}として一切を忘れようとしていた。」（フランス語版では《et j'étais dans un état qui touchait presque à l'extase.》と書かれてあり、「一切を忘れようとしていた」に相当する文はありません。しかし、この強調の翻訳加筆は効果的かもしれません。）読者が知るのは、ロミュアルドが女性経験のないまま、この日まで来た人間であり、待ち望んできた叙階式に臨んで喜びの余り、異様な昂揚状態にあるということです。ここの発言は、ロミュアルドが言う「不可解な蠱惑^{fascination inexplicable}」が、女性に触れた経験がない彼の禁欲生活と興奮と忘我が生み出した妄想の結果だと暗示しつつ、一層現実と夢の間を曖昧にしているのです。

中公文庫で『潤一郎ラビリンス』というのが全16巻出ています。これは谷崎潤一郎の作品をテーマ別に分類収録した面白いシリーズです。一卷ごとにテーマがつけられているのですが、いくつか列挙してみます。「異国綺談」、「怪奇幻想倶楽部」、「分身」、「神と人の間」、「女人幻想」、「官能小説集」等々。どうですか？ さきほど、『恋する死女』に関連あるテーマを五つ紹介しました。参考までに言うと、残りの三つは「生命を持ち始める芸術作品、麻薬が生む幻想」、「悪魔」、「オカルト、魔術、輪廻、迷信」です。フランス19世紀の作家ゴーチエと日本の大正期の作家谷崎潤一郎のテーマが、驚くほど類似しており、重なり合っていることが分かります。欲望や幻想やフェティシズムに目がないぼくが、この二人の作家に惹かれてきたのも蝶々が花の蜜に惹かれるように自然なことです。

谷崎から引用してみます。「彼は毎年青葉の時節に遭遇すると、体内に潜在する盲目な意識が、其の昔習い覚えた幸福な状態を習慣的に呼び起こす為め、今も猶歓楽の境に或るかのような夢心地に誘い出されることがあった。一生に一度の、初恋時代の夏の印象が深く脳裏に刻まれて居て、其の季候にさえなれば彼は恋人の再来を疑がった。爽やかな緑陰の風の薫り、縁日の町の夜の灯^{ともしび}、大空にただよう白雲の影、——凡ての現象が過去の生活の痕跡を留めて、見る物聞^{ものき}く物に、彼は恋人

の脈拍の響きを感じた。』（『熱風に吹かれて』という作品名も効果的ですね。読者の連想を、欲望に吹かれて、駆り立てられているというイメージに容易につなげるからです。）

『恋する死女』からの引用を続けます。「そしてその美しい女は、その闇黒を背景に燦爛とした浮彫になって、丁度天使の来迎を仰ぐように、わしの眼の前に現れて来た。彼女は、自ら輝いているように、しかも光を受けていると云うよりは、自ら光を放っているように見えたのである。」神の道への永遠の入信を受諾せんとする直前に、運命が美と快樂の化身のような女をロミュアルドに目撃させます。無意識に抑制してきた欲望が沸騰して、彼の眼前に輝かしい女人の姿を出現させたと考えられることもできます。語り手が用いる比喻に注目してみましょう。「天使のような」この女は、さらに「女神のような姿と態度」を見せ、「手は曙の女神の指のように、光を透すかと思われる程、清らか」なのです。まだ、ためらうかのような欲望が、彼女を天上的なイメージで飾り、その清淨なイメージを通して彼女を見るように彼を誘っているかのようです。ロミュアルドは理性が揺らぎつつあるのを知りながらそれでも、この女性を暗転した教会の闇の中に浮かび上がった発光体、光り輝く導きの女神だと納得したがっているのです。

彼は彼女の視線に心を射貫かれたと感じています。恋の矢でハートを射止められたかのように。その一方で、ロミュアルドの精神は曖昧な領域に漂い、両義性の中で宙ぶらりんになっています。「わしはその眼に輝いている火が、天上から来たのか、地獄から来たのかを知らない。けれども、それは確にその二つの中のどちらから来たのである。彼女は天使か、さもなくば悪魔である。そして恐らくは又両方であったらしい。」語り手は、このように天使の中に悪魔を見たり、悪魔の中に天使を見たり、天国と地獄を同じレベルに置いています。そしてまた引用ですが、「物に驚いた蛇か孔雀のような、おののくような嬌態」という表現が示すように、恐怖と美を同時に享受しています。こうした正反対のものを併置共存させ、正反対のものを等値関係に置きやり方はゴーチエに特徴的です。矛盾や対立物の混在が、魅力的な幻想の発生装置として機能しているのです。

ところで、クラリモンドの目の色は、芥川の訳によれば「海のように青い」となっていました。フランス語では《prunelles vert de mer》ですから、誤解のないように正確を期すと、緑、グリーンということになります。フランス語の同じ表現が先の方にもう一度出てきます。ロミュアルドが自分の教会に落ち着いた後の部分です。「気のせい、か、榆の木の下にわしと同じように歩いている女の姿が見え、しかもその榆の葉の間からは、海のような緑色の眼の輝いているのが見えた。」芥川はこちらでは緑色と訳しています。他、「彼女の眼の緑色の光」、「彼女の眼は、再び緑玉髓の如く輝いた」等、緑色の眼が強調されています。緑色の眼というのは、『恋する死女』で悪魔的な意味、悪魔を暗示する働きをしていると考えられています。呪縛するような緑の目ということになるのでしょうか。ここで、ぼくはピエール・ロチという作家の『アジャデ』を思い出すのです。クラリモンドが死後もロミュアルドを魅惑し続けたように、死後もロチを魅惑し続けたアジャデも緑色の目をしています。詳しい話はここではできません。ぼくが書いた文章を引用させていただきます。「ロチは、その女の子っぽさを宿した若々しい緑の目に即座に感応する。ロチは、最初は海の緑

を思わせるアジヤデの目に魅了されたただけだった。けれども、その恋の相手の存在のすべてがロチを強烈に捉え、魅了していく。」（拙論『ピエール・ロチにおけるセピア色の現在』、福岡大学研究部論集。）

普段、私たちが日常生活で服やアクセサリィの色について個人的に感じている印象は、眼や髪の毛のような人体の一部の色が伝統的に象徴している意味とはまた違いますよね。みんなそれぞれ、好きな色を自分のラッキーカラーにして、その色を肯定的なイメージで見ているわけです。一般的には緑はむしろ、安心、幸福のようなイメージでしょうか。東京両国江戸博物館で開催された「ナポレオン展」を見たことがあります。展示物や解説を見て、ナポレオンの愛用の色を知りました。何か分かりますか？ 緑です。彼の部屋のカーテンも壁紙も、纏うマントもすべて緑です。ナポレオンと自分を比べるつもりは全然ありません、本当です、それほど厚かましい意図はこれっぽちもありません。ありませんけれど、言っておきたい。ほくも一着だけですが、グリーンのジャケットを持っています。それと、結果として回りに集まったものの色を見ると、どこかで自分が緑に惹かれているのが分かるのです。ボールペンも万年筆も緑なのです。他の色があっても緑のをつい買ってしまう癖があるみたいです。今、手元にこうしてあるメモ帳も緑です。様々な緑の色合い、グラデーションが美しいでしょ。ここには、ほくの秘密、人前では口にするのが憚られる妖しいあれこれではなくて、そういうものではなくてですね、本や映画からの引用みたいなものがメモされているのです。忘れるところでした、まだありました。財布も緑です。

女性の妖艶や豊艶な姿態は死ぬまで眼を楽しませてくれます。過去に愛したことのある、あるいは今愛している女性の姿を重ね合わせ、想像することができるのも文学を読む楽しみなのです。語り手の欲望の眼差しが鮮明に描き出すクラリモンドの容貌をもう少し觀賞しましょう。「それからこの上もなく光沢のある真珠の歯が、^{つや}紅い微笑の中にきらめいて、^{ほほえみ}唇の彎む毎に、^{くちびる ゆが}小さな靨が、^{えくぼ しゅ}繻子のような薔薇色のうつくしい頬に現れる。」どうですか？ ロミユアルドならずとも、クラリモンドの真珠の歯を現わす紅い唇に接近したくなるし、微笑む笑窪に口づけたい気になります。（「この上もなく光沢のある」はフランス語では《du plus bel orient》となっています。orientですから、ほくは何の意識もなく深く考えることもなく「東洋」の意味で読んでいました。芥川の訳を見た時おかしいなと思ったのですが、おかしいのはほくの方でした。辞書によれば、orientには「真珠の光沢」の意味がありますから、芥川の方が正しいのです。知っているつमりの単語ほど気をつけないといけないという典型的な例です。勉強になりました。）後に書かれてあるように、クラリモンドもまたロミユアルドに惹かれたのです。それで、男の目に映じたクラリモンドの姿が描かれているこの部分に則して、自分を印象づけるということを女性の側から考えてみます。恐らく女性はこれと思ったら、恋の相手、好きな相手に自分を発見してもらう才能に恵まれているのです。自分の発見を否応なく要請するかのような魅力、光とかオーラを纏うことができるのです。相手の男の目に、大勢の中で、自分だけにスポットが当たって見えるかのようにする術を心得ているのです。熱烈な恋のエネルギーがそういうことを可能にするのかもしれない。

ほくは、ある女性の特別な場所にあるホクロや、ある女性の腋の下が好きだったことがあります。誰にでも、相手のある部分がとりわけ好き、愛着を覚えるということがありますよね。谷崎潤一郎の場合は特に足、足崇拜でした。好きな女性の足に極端な愛着、執着を示すのです。『富美子の足』や『瘋癲老人日記』を読んでみたらどうでしょう。粘着質で惨めで滑稽で壮大な足フェティシズムが分かりますよ。『富美子の足』の主人公は触れたりいじめられたりするのが好きだった富美子の足の形そのままの墓石を造らせませす。死後も墓の下で、上から好きな足に踏まれたまま喜悅の涙を流すのです。羨ましいです。谷崎は自分が愛した現実の肉体の思い出を基にして、そこに幻想の美を投影して女性を描くのが巧みでした。谷崎自身の欲望が沁み出してくるような耽美な文章なのです。一例を挙げておきましょう。「鈍いランプの光線の中に浮かんだ顔は、むっちりと圓く肥えて居て、輝かしいまでに色が白い。殊に薄手^{うすて}な小鼻の肉のあたりなどはほんのりと紅く透き徹って居る。其れにも増して美しいのは、身に着けた黒縹子の服よりも尚真黒な、つやつやとした髪の毛と、無限の愛嬌に富んだ、びっくりしたように眸^{みは}って居る生き生きとした瞳の表情である。」(『秦准の夜』) 「殊に彼の女のあの魅力ある眸^{まなざし}——一体幸吉は、圓い眼よりも細い眼の方に餘計惹き付けられたが、——或る時は長い睫毛の陰にぼんやりと眠って居るような、或る時は油断のならぬ陰険な計画を廻して居るような、或る時は人を人とも思わぬ驕慢な睥睨を湛えて居るような、針の如く閃々と輝く細い眼の光に想到すると、彼は二度と再び此のような詛え向きの女に出遇う機会はあるまいと思われた。」(『捨てられる迄』)

語り手がクラリモンドの姿態を描いている部分は、「夢や幻覚性の幻影」や「分身」のテーマを通して読み取ることもできそうです。それは、ロミュアルドが司祭の宗教生活と美女との官能生活、どちらを選ぶ決意もつけられないまま、二つの間で宙ぶらりんになっていて、自分の中に二つの傾向、二つの人格を感じているからです。迷いと躊躇。意志が効力を失いブロックされ外部に働きかけることができない状態。それゆえに、ロミュアルドの意識は、目撃していることが現実とも夢とも、事実とも幻影とも思える曖昧な薄明の中にあるのです。引用してみます。「わしは否定の綴音を一つでも洩^{もら}して、わしの意志を表白^{うな}する事すら出来なかった。わしは眼が醒^さめていながら、生命にも関わる一語を叫ぼうとして、魔^まされている人間のような心持がした。」そしてもう一つ引用を。「わしの恋は、僅^{わずか}一時間程経つ内に、抜き難い根を下ろしてしまった。わしはその恋を思切ろうなどとは夢にも思わなかった。〔中略〕彼女が一目見たばかりにわしの性質は一変してしまったのである。彼女は己の意志をわしの生命の中に吹き込んだ。そしてわしはもうわし自身の肉体の中に生活しないで、彼女の肉体の中に、しかも彼女の為に生活するようになった。」興味深いのは恋もまた、自己を失わせ、もう一つの自分、分身を生み出すことがある制御不能なもののイメージで捉えられていることです。(「彼女が一目」の前にフランス語版では、《Cette femme s'était complètement emparée de moi》とあるのですが、芥川の訳にこの部分はありません。ある方が、虜、囚人、恋の呪縛のイメージが鮮明になると思います。それから、「彼女の為に」は、フランス語では《par elle》となっているので、「彼女によって」でしょうか、正確には。クラリモンドの

恋の魔力で生かされて感じが表現されています。もう一つ気がついたことを指摘しておきます。「僅一時間程経つ内に」の部分ですけれど、フランス語では《né tout à l'heure》と書かれていますので、「さっき生まれた」と訳したい所です。それを「僅一時間程経つ内に」とした芥川の工夫には感心します。なぜかという、もっと先の方にある「祭壇の前で一時間を過ごした為に」という記述があり、これを活かしているからです。コンテキストに注意を払い、自分の翻訳に意識的であればできないことです。

最後まで物語は夢か現か、実体か幻かが定かならぬ曖昧さの中で続いていきます。ゴーチエは巧妙にも、次のような記述を効果的に配置しています。例えば、「わたしには実際か幻惑かはしらぬが」、「わたしは思わずある夢幻の中に陥ってしまった」、「気を失って倒れてしまった」、「正気に帰って見ると」、「殆ど何事も記憶していない」、「わたしは夢を見ていたのだとは信じられない」、「すると、ある夜、不思議な夢を見た」、「夢の中では」、「と鉛のような、夢も見ない眠りがわしの上に落ちて、次の朝迄、わしを前後を忘れさせてしまった」、「不思議な出来事の回想が」、「わしの熱した空想が造った霧のようなものだと思います」、「その感覚が余りに澁刺はつらつとしているので、その事実でない事を信じるのは、甚はなはだしく困難であった」、「そしてわしの夢も続けられた」、「わたしは夢と現実とを分つ事も出来なければ、何処に現実が始まり、どこに夢が完るかさえも見出す事が出来なかった」、「わたしはヴェニスに住んだ。少なくとも住んだと信じていた」、「この幻怪な事実の中にどれ程の幻想と印象とが含まれているかを正確に発見するのは到底不可能」、「わたしは事実おわにせよ夢幻にせよ」等々。ロミュアルドの意識の揺れと薄明状態を表わす表現が何度となく、絶妙のタイミングで繰り返し現れます。そして読者の意識もまた出口のない迷宮に幽閉されたかのような宙づり状態に置かれるのです。読者は夢の中の夢を見ているような、白昼夢をみているような判然としない心持ちに捉えられたままなのです。

この意識の薄明状態曖昧状態の中で、ロミュアルドの人格は分裂の度を強めていきます。別人、分身（ドッペルゲンガー）のテーマが一層濃厚な蠱惑と不安の雰囲気の中で展開されていきます。「その夜からわしの性質は、或意味に於て二等分されたように思われる。云わばわしの内に二人の人がいて、それが互に知らずにいるのである。或時はわたしは夜になると紳士になった夢を見る僧侶だと思うが、又或時には、僧侶になった夢を見ている紳士だと思ふ事もある。」「わたしは常に、思切つて澁刺はつらつとした心で、わしの二つの生活を気長く観照していたのである。」「かくしてわたしも常に幸福であった。唯、不幸なのは、毎夜必ずうな魔まされる時だけで、その時はわしが貧しい田舎の牧師補になった夢を見ながら、昼間の淫楽を悔いて、贖罪と苦行とに一心を捧げているのである。」

ばくも、蠱惑的で淫らな夢を見たいです。本当は好きな女性との蠱惑的で淫らな現実の方がいいけれど。現実が手に入らない時はせめて夢で見たいものです。クラリモンドとロミュアルドがヴェニスで耽溺したような快樂の日々を体験したいです。無理なら、夢で見させて欲しい。

谷崎潤一郎の『金と銀』から引用します。「八月中旬の酷烈な暑熱が、ペンキ塗りの南京下見なんきんじたみの薄っぺらな板で囲った畫室はいしつの四壁を、焙炉ほいろのように火照らせて居る中で、青野は折々襲めって来る眩

暈^{まい}の発作^{ほっさ}と闘いながら、晝は芸術に夜は悪魔に、かわるがわるその魂と肉体とを捧げた。」「己は何だか、自分が青野の影法師ではないかと云う気がして来る。実際、若し此処に、全然同一な美を表現しようとする二人の芸術家が居るとしたら、二人のうちの孰^{いず}か一人は存在の必要がない事になる。」「畢竟己^{ひつきよう}の感ずる脅威は、自分の離魂体に悩まされたウィリアム、ウィルソンの感じた脅威と同じものなんだ。」ウィリアム・ウィルソンは分身テーマを扱ったポーの同名作品の登場人物のことで、それにしても、神経衰弱（神経衰弱というのは大正期の作家芥川や谷崎になじみ深い病気であり、関心を寄せるテーマでもありました）の妄想幻想懶惰の雰囲気^{いづ}が最初の引用には色濃く出ています。そして、後の二つの引用には、芸術家の二つの才能、二つの自己、二つの分身、そのテーマが読み取れます。

作品を読み終えてから改めて考えてみると、『恋する死女』というのは内容を雄弁に言い表しているぴったりの題名ですね。クラリモンドは恋の熱情に駆られて死後の世界から蘇る女、その恋を享樂し続けるためには血を我が身に吸入しなければならぬ女吸血鬼なのですから。

叙階式が終わり、司祭職が約束されたロミュアルドですけど、彼は相変わらず、後悔と嫉み、諦めきれない恋の欲望に苛まれています。宗教生活と恋愛生活は彼に、それぞれ死と生命のイメージ、正反対の対照的なイメージを掻き立てるのです。ゴーチエはコントラスト鮮やかな文章が上手な作家です。今から引用する部分はまるで、散文詩を読んでいるかのような印象を読者に与えてくれます。「僧侶になる！——それは独身でいると云う事だ。決して恋をしないと云う事だ。性^{セックス}とか年齢とかの区別を構わなくなる事だ。凡ての美から背き去る事だ。眼を抉りぬいてしまう事だ。永久に寺院とか僧院とかの冷たい影の中に蹲^{うずくま}って隠れている事だ。見知らない屍体に番をされている事だ。死にかかっている人間ばかり訪ねて行く事だ。そして己自身の死^{いた}を悼む喪服として、何時でも黒い法衣^{ほうえ}を着ている事だ。云わば、君の着物が、君の亡骸^{なきがら}を納めた棺^{ひつぎ}の棺布^{かけぎぬ}の役に立つのである。」

（「永久に」の部分はフランス語版にはありません。それと、芥川の訳ではマルで終わっている文は最後の「役に立つのである。」を除き、フランス語版では点（ヴィルギュール）で、列挙されています。）「わしは今更のようにわしの生命が、丁度地下の湖のように、拡がり溢れつつ水嵩を増して来るのを感じず。わしの血は烈しくわしの動脈をめぐって踊り上る。わしの久しく抑圧していた青春は、千年に一度花の咲く蘆薈^{ろかい}のように、生々と萌え出て迅雷の響と共に花を開くのだ。」（蘆薈^{ろかい}というのは、フランス語版を見ると分かるのですが、アロエのことです。「千年」はフランス語版では百年と書かれています。「わしの久しく」から「開くのだ」まではフランス語では、《ma jeunesse, si longtemps comprimée, éclatait tout d'un coup comme l'aloés qui met cent ans et qui éclôt avec un coup de tonnerre.》となっています。芥川の訳も悪くはないのですが、構文から逸脱し過ぎている気がします。彼の訳を一部活かしつつ、ぼくなりに手直しするとこんな感じになります。「わしの久しく抑圧していた青春は、百年に一度花が咲き、迅雷の響きを立てて花を開くアロエのように突然、生々と萌え出るのだ。」どうも、やはり芥川に比べると文学的、詩的香気に欠けますね、ぼくのは。）

ロミュアルドはクラリモンドとは（芥川流の言葉を使うと）没交渉のまま、接触の機会を得ることのできないままです。そして未練を残しながら、そのまま彼はセラピオン師に伴われて、驟馬に乗り、任命された教会へと出発します。（セラピオンという人物は宗教的模範、理性と厳格を象徴するような人です。狂気じみた恋に我を忘れるロミュアルドを正気に立ち返らせる役割を担っています。そして、さらに言うに破滅から抜け出したいロミュアルドの意識が生み出したもう一人の自分、（先程の谷崎潤一郎からの引用に見るごとく）自分以外の人間に投影されたもう一つの自分の別人格と読み取ることもできそうです。フランス語版の説明によれば、セラピオンというのはホフマンの登場人物から借用した名前、ホフマンへの賛美の形の一つとなっています。）職務を忠実に禁欲的に果たしながらも、ロミュアルドの唇にはクラリモンドのという名前だけが「われ知らず繰返す畳句のように」浮かんでくるのです。

そして、一年が過ぎた、ある夜のことで。「青銅のような顔をして、立派な外国の装いをした男」が訪れます。男が仕える「或貴夫人」が今際の際で、司祭に来てもらいたがっている、と言うのです。その貴夫人というのがクラリモンドであることを、私たちは知っていますよね。「堂々とした^{ごうしゃ}豪華の趣致と楚々とした^{そそ}優麗の風格とを併せ有している」クラリモンドの館まで黒馬が運んでくれる、その移動、途上の描写に注目しましょう。「わし達はひたすらに途を急いだ。大地はわたしたちの下で、青ざめた灰色の長い縞のように、後へ後へと流れて行く。木立の黒い影絵は、打ち破られた軍隊のように、わたしたちの右左を、逃げて行くように見える。」夢の中を疾駆、疾走しているかのような、眩暈に誘うような描写が続きます。「案内の男は馬の歩みの緩むのを見ると、殆ど人間とは思われぬような、不思議な喉音を上げて、叱咤する。すると、馬は又、元のように無二無三に狂奔するのである。」

漆黒の森、夜闇の中で蹄鉄が石に当って生じる火花、狐火、夜鳥の鳴き声や山猫の燐光のように光る眼等々、すべては不気味で悪夢じみた雰囲気を作り出す道具立てとして効果的に機能しています。物語構造的には、この部分はそこを通り抜けることで幻想領域に至る中間地帯となっています。そこを経過して、現実以外の場所、幻影世界、幽冥界のような所にロミュアルドと読者が入り込む通過儀礼的な境目なのです。男の訪問は、幻想世界へとロミュアルドを連れて行く使者の訪れと同じことなのです。ところで、ホフマンの『婚約した亡霊』では登場人物の一人が訳知り風に言っています。訳してみます。「秋、雷雨風、暖炉の火、ポンチ酒は切り離せない四つのもので、それらは私たちの中に恐怖への秘かな気持ちを掻き立てるのだ。」こう断定する若き弁護士ダゴベールは、自らの発言に自縄自縛されるかのように、幻想体験に引き込まれていくこととなります。このように、幻想小説と呼ばれる物語では、幻想に誘う仕掛け、幻想的な雰囲気作りに欠かせない条件、幻想を準備する背景が効果的に用いられ、配置されていなければなりません。今まで見てきたように、ゴーチエもまた幻想の道具立てを巧く活かし、耽美と恐怖の、妖艶にして玲瓏な、伶俐と情熱の雰囲気作りに腕の冴えを見せています。

ロミュアルドが到着した時には、すでにクラリモンドは亡くなった後です。間に合わなかったの

です。さあ、「欲望の作用による死女の蘇り」、「吸血行為」を見ていきましょう。まずは、死者となったクラリモンドの姿、嬌態の様、室内の淫靡な空気をいくつか紹介します。死せる女の肉体が語り手に掻き立てるエロティシズムが濃厚に蠱惑的に匂い立っています。例えば、次の文章はどうでしょう。「青ざめた光は屍体の傍に黄色く瞬く通夜の蠟燭の代りと云うよりは、寧ろ淫惑な歡樂の為にわざと作られた薄明かりの如く思われる。」「閨房の空気はわしを酔わせ、半ば凋んだ薔薇の花の熱を病んだような匂はわしの頭脳に滲み込んだ。」「いや寧ろ花嫁の閨へはいった花婿だと想像した。花嫁はしとやかに、美しい顔を隠して、羞しさに姿を残る隈なく掩おうとしているのである。わしは胸も裂けん許りの悲しみを抱きながら、しかも物狂わしい希望にそそられて、恐怖と快樂におのきながら、彼女の上に見をかがめて、経帷子の端に手をかけた。」「それ等の物が皆彼女に悲しい貞淑と内心の苦痛と云う可らざる妖艶な容子を与えている。未だ小さな青い花で編みである長い乱れ髪は、彼女の頭にまばゆい枕を造って、その房々した巻き毛は、裸身の肩を掩っている。」

クラリモンドは死することで、ロミュアルドにとって一層欲望をそそる対象に化しています、まるで愛する女を失うことで男の欲望が異常なほど昂進するように。クラリモンドの肉体は死ぬことで一層欲望を掻き立てるようになったのです、死のヴェールに包まれることでより官能を刺激するようになったのです。少なくともロミュアルドにはそう感じられるのです。思い出してください、こんな風に書かれてありましたよね。「そのすぐれた肉体の形の完全さは、『死』の影で浄められたいるとは云え、常よりも更に淫惑な感じを起さしめた。」「『死』も彼女にとっては、最後の嬌態に過ぎないのである。」

そもそも、アラン・ビュイジヌの言うように、ゴーチエ作品に漂う悲しい欲望は「回顧的に」作動しています。「欲望は常に回顧的で、失われた、不在の、発見できない対象を狙うことに一貫して捧げられる。本当に欲情をそそるのは死別だけなのである。」(Théophile Gautier, *Contes et récits fantastiques*, Le livre de Poche, 1990. を参照されたし。)ゴーチエ作品の登場人物たちの恋も愛も過去に向かって、死者に向かって燃え上がるのです。回顧的な心情というのはゴーチエにもロチにも共通しているわけで、ほくが二人の作家を共に好きな理由の一つはそこにあるのかもしれない。

ロミュアルドの欲望はキスを通してクラリモンドに流れ込み、彼女を目覚めさせます。そうです、目覚めさせるのです、というのも彼女の安らかな死に顔は眠っているのに似ていると書かれているのですから。逆に、クラリモンドの側からすると、彼女は恋の熱情の余り生き返りたくて、魅惑的な姿態でロミュアルドの欲望を掻き立て、キスへと誘うのです。欲望の注入は生命の注入、欲望の受容は生命の受容と同義なのです。「猶わが唯一の恋人なる彼女の唇に、接吻を印してゆく最後の悲しい快樂を、棄てることが出来なかった……と奇跡なるかな、かすかな呼吸はわしの呼吸に交って、クラリモンドの口は、わしの熱情に溢れた接吻に応じたのである。彼女の眼は開いて、先きの輝きを示してくれる。」再会を約束した後で、クラリモンドの魂は一旦どこかへ飛び去ってしまいます。

気を失って倒れたロミュアルドは三日間（その間の記憶は完全に脱落しているのです）の眠りから目覚めます。ある朝、見舞いに訪れたセラピオン師が、クラリモンドの死を知らせ、彼女が吸血鬼であることを暗示します。こうして、ロミュアルドと読者は美しい恐怖と抵抗できない快樂を待つように、彼女の訪問を待つのです。恋する女吸血鬼の約束は実行されます。クラリモンドは「墓の中に置くような形をした小さなランプを持って」、「リンネルの経帷子」に身を包んだ姿で現れます。そして、「銀のように冴えている、しかも天鵝絨のようにやさしい柔らかい声で」死よりも強い恋ゆえに訪ねてきたことを告げて、冷たい手へのキスを求めます。拒める男がいるでしょうか。

（こういう場合、ほくなら喜んで、あらゆる場所をキスの愛撫で覆い尽くすことを断言します。）ロミュアルドも拒めるわけがありません。「クラリモンドの皮膚の冷さはわしに皮膚にしみ入って、わしは淫慾のおののきが、全身を通うのを感じずにはいられなかった。」

二人はヴェニスへと快樂の旅に旅立ちます。それにしても、何故ヴェニスなのでしょう？ そもそも、イタリアは伝統的に恋人たちが愛を享受する目的で出かけていくにふさわしい国だと見なされてきました。ジョルジュ・サンドとミュッセも行ったし、ゴーチエもマテイさんを同伴して行っています。イタリアの中でも、ヴェニスが恋と快樂に最高の一番の場所だと一般的に了解されているのです。ド・マンディアルグはヴェニスと日本を並べて、次のように書いています。「ヴェニスと日本には一つならず共通点がある。女の官能と無氣力にするほどの快樂が本当に理解されたのはその人々によってだけなのだ。それは間違いなく愚鈍とは一番無縁の人間たちの中に入る人々なのだから。」（*Dictionnaire de Citations et Jugements*, Robert, 1991. を参照。） 007ことジェームス・ボンドも、運河沿いの道で例のごとく美女に接近しています。だから、ほくも行きたいです、ヴェネチアに好きな女性と。運河の街で恋と快樂を堪能したいです。何々したいというような願いの言葉は、実現することなくそのままの願いのままで終わることが多いものです。意志を強く表明しないと、何も実現しませんよね。よーし、絶対行くぞ、快樂にまみれた日々を過ごすぞ、と掛け声だけは勇ましく。

ロミュアルドがヴェニスで味わう快樂が大きければ大きいほど、多彩であれば多彩であるほど、それを与えてくれるクラリモンドへの彼の愛情と情熱は増していきます。ロミュアルドの目にクラリモンドを一層魅力的に蠱惑的に見せることになるのです。「わしは実に狂気のように彼女を愛していたのである。一人のクラリモンドを持つのは、二十人の情婦を持つのにも均しい。否、あらゆる女を持つのにも均しい。彼女はその一身に、無数の容貌の変化と無数の清新な嬌艶とを蔵している——真に彼女は女のカメレオンである。彼女はわしの愛を百倍にして返してくれた。」（ここの芥川の訳には欠落が目立ちます。フランス語版にある文が抜けています。「愛していたのである」と「一人の」の間に本来はあるはずの、《*Elle eût réveille la satiété même et fixé l'inconstance.*》が訳されていません。「彼女は飽満さえも刺激してくれて、浮気な気持ちを抑えてくれただろう。」という具合に訳してみました。クラリモンドが飽きさせることのない無数の快樂の技巧、性の秘術を尽くしてくれることを示しています。もう一つ、「蔵している」と「真に」の間にある文が訳さ

れていません。それは以下のようなフランス語文で、以下のように訳すことができるでしょう。

《Elle vous faisait commettre avec elle l'infidélité que vous eussiez commise avec d'autres, en prenant complètement le caractère, l'allure et le genre de beauté de la femme qui paraissait vous plaire.》「彼女は、あなたが他の女たちと犯したかもしれない不実を自分との間で犯させるのだ、あなたの気に入ったかに見える女の性格、物腰、美貌のタイプを完璧に身につけて。」これもまた、クラリモンドの千変万化を、無尽蔵の性の技巧を熟知していることを示しています。彼女一人がいれば、彼女の中であらゆる女性との性を楽しむことができるのですから。一人の女性と交わることで何人もの女たちと交わった感覚を味わう、一人の女性が尽きることのない技巧で常に変化に満ちた快楽を味わわせてくれる。これは一般化して言うと、19世紀の男たちの性幻想の一つ、限定化して言うとゴーチエの個人的な性幻想の一つかもしれません。男女お互いが性を楽しみ楽しませ、両方が快楽を与え与えられる関係が理想的だと言われている現代でも実は、一方的な偏った性幻想は様々な形で男女の中に根強く残っているのかもしれないです。

あらゆる快楽を与えてくれるクラリモンド、彼女の健康がすぐれません。血が通っていないみたいに、顔も青白い。そんなある日、女吸血鬼の本性を露呈してしまいます。ロミュアルドの傷口に飛びかかると、そこから流れ出る血を喜悅の表情を浮かべて吸い始めるのです。「しかも彼女は静かに注意しつつ、^{あとか めききじょうず}恰も鑑定上手が、セレスやシラキュウズの酒を味わうように、その小さな口に何杯となく^{すす}啜って飽かないのである。と、次第に彼女の^{まぶた}瞼は垂れ、緑色の眼の瞳は円いと云うよりも、^{むし}寧ろ楕円になった。そしてわしの手^にに接吻しようとしては、口を離すかと思うと、又更に幾滴かの紅い滴を吸い出そうとして、わしの傷口にその唇をあてるのであった。血がもう出ないのを見ると、彼女は^{みずみず}瑞々した、光のある眼を輝かしながら、五月の朝よりも薔薇色に若やいで、身を起した。顔はつやつやと肉附いて、手も温かにしめっている——常よりも一層美しく、健康も今は全く恢復しているのである。」

さらに、ある夜のこと、クラリモンドがワイングラスに粉末を落とすのが鏡に映って見えたのです。眠った振りをしていたロミュアルドの耳に、クラリモンドの独り言が聞こえてきます。「私は唯、貴方の命から、私の命が永久に亡びてしまわないだけの物を頂くのだわ。私は貴方を愛しているのでしょ、だから私は外に恋人を拵えて、その人の血管を吸い干す事にした方がいいのだわ。けれど貴方を知ってから、私、外の男は皆厭になってしまったのですもの・・・」一途な恋の思いと他の男たちへの嫌悪がロミュアルドの心を打ちます。恋人の皮膚に傷をつけて吸血行為に及ぶのは嫌なのだけれど、愛する恋人だけを唯一の血の供給源にせざるを得ないクラリモンドの愛と悲しみが吐露されています。吸血鬼という彼女の正体を知っても、ロミュアルドはクラリモンドを愛さずにはいられないのです。「そして喜んでその人工の生命を与えるに足るだけの血潮を、自ら進んで与えようと思った。^{しかのみならず}加之、わしは殆ど彼女を恐しく思わなかった。わしはわしの血を一滴ずつ^{とり}取り引するよりも、わしの腕の血管を自ら^さ割いて、彼女にこう云ってやりたかった。『お飲み、そうしてわしの愛をわしの血潮と一しょに、お前の体^{しみとお}に滲透らせておくれ。』」（芥川の訳からは脱落して

いますが、「思わなかった」と「わしはわしの血を」の間に、フランス語版では次の文が入っています。《la femme me répondait du vampire, et ce que j'avais entendu et vu me rassurait complètement; j'avais alors des veines plantueuses qui ne se seraient pas de sitôt épuisées,》こんな具合に訳してみましたけれど、どうでしょうか。「女が吸血鬼であるのは確かだったけれど、今まで見聞きしてきたことからしてわしはすっかり安心だった。その頃わしの血管はたっぷり、そんなに早く涸れてしまうことなどなかったのだ。）」

真相に気づいても、ロミュアルドはそれを仄めかすことも暴露することはありません。知らないふりを続けるのです。「わしは、彼女がわしに拵えてくれた魔酔の酒の事や、あの留針の出来事には、気をつけて一言もそれに及ばないようにした。そしてわし達は最も円満な調和を楽しんでゆく事が出来たのである。」しかし、物語構造上（幻想から醒め、正気に立ち返り、後は宗教生活を全うしてきた老司祭の回顧譚）、ロミュアルドは快樂生活に終止符を打つ方を選択しなければなりません。豪奢と放埒、質素と禁欲の二重生活を続けるには余りに犠牲と疲労消耗が大きいのです。彼はセラピオン師に言われるまま、墓を暴き、クラリモンド＝吸血鬼を消滅させる冒瀆行為＝神聖儀式に同意してしまいます。「憐むべきクラリモンドは、聖水がかかると共に、美しい肉体も忽ち塵土となって、唯、形もない、恐ろしい灰燼の一塊と、半ば爛壞した腐肉の一堆とが残った。」こうして、ロミュアルドと読者が共有してきた淫蕩な夢、快樂、恋の幻想は美しい霧とともに霧消してしまうのです。美しいヴェールが消滅した後に残されたものは、血を吸われるような背徳的な快樂ではなくて、吸われる喜びさえ味わうことのない退屈の色を帯びた血が淀んでいる生活なのです。嫌な真実なら、知らないままにいる方が幸せなことも人生にはありますよね。恋というものがそもそも美しい幻想だとすると、醜悪な現実よりは魅惑の幻影、おぞましい事実よりは蠱惑の嘘を選んでみたくもなります。ぼくなら、快樂の夢と蠱惑の幻影に全身全霊で飛び込みます。好きな女性との恋愛幻想にすべてのエネルギーを蕩尽します、燃やし尽くします。そういう機会があれば、という条件付きですけど、その機会がロミュアルドに訪れたようには訪れないんですよ。現実の中ではもちろん、毎夜、夢の中でもぼくは待っているのだけれど、その素敵な訪れを。

マルク・エジェルダンジェによれば、ゴーチエが幻想小説というジャンルの完成度を高めたのは、「語りの技法においてであり、個人体験の転移によって」なのです。最後にそのゴーチエの個人体験がどんな風に作品に投影されているのか、その一例を紹介しておきます。「二十四歳までのわしの生活は」宗教修業の毎日だったとロミュアルドは告白していました。そして、クラリモンドに出会うわけです。ゴーチエも同じくらいの年齢の時に、シダリーズという女性と知り合います。その時期、ゴーチエは仲間たちとボヘミアン生活、放蕩生活を送っていて、それが、ロミュアルドの淫蕩、遊惰に転移されているかもしれません。そして、シダリーズのイメージはクラリモンドに投影されています。以前書いた自分の文章を引用させていただきます。「病に斃れ、若くして死亡する美女という彼女のイメージがゴーチエの記憶に刻印されることとなります。「恋する死女」という作

品、これは美しい女吸血鬼の物語ですけど、この中にシダリーズという女の思い出が投影されている、と想像することができます。相手の死によって中断されたり、予期せざる事情で別れを余儀なくされたり、一方的な思いの段階のまま成就することなく終わった恋愛の経験がお有りでしょうか？ こういう思い出は、後を引くことがあります。妙に美化されたりして、消えずに燻り続けるのです。」(拙論『フランス文学の作家たちの恋愛模様』、福岡大学研究部論集、2002年。)

現実の女や恋の思い出を作品に投影するのはどんな作家にでも見られることです。しかし、ゴーチエの場合、それだけでなく、現実を元に作品化されたものがまた、現実には作用することになるのです。作品化された女や恋の記憶が、彼の現実の恋に影響を及ぼすのです。ゴーチエは後にエルネスタとカルロッタという姉妹の両方が好きになります。姉エルネスタはマリー・グリーンが目でした。彼女に会った時、ゴーチエは当然、その目の色にクラリモンドの目の緑を見て、エルネスタに惹かれたはずなのです。妹カルロッタへの思いは死ぬまでゴーチエから消えることはありませんでした。ロミュアルドは「わしは一度ならず彼女を惜んだ。いや今も彼女を惜んでいる」と作品の最後で言っていました。死んだクラリモンドへの消えることのないロミュアルドの思いは、現実のゴーチエの中に、生きている現実のカルロッタに対する生涯続く恋の形で、引き継がれているかのように思えるのです。

亡霊との恋は日本の現代作家の作品にも描かれています。小池真理子さんの『ノスタルジア』がその一つです。読んでみてはいかがでしょう。吉田美奈子さんという歌手がいます。彼女が歌う「夢で逢えたら」という歌が思い浮かびます。(いくつかの歌がイメージさせる物語をそれぞれドラマ化したDVD『恋する日曜日』に付いていたCDで聴きました。他、今井美樹、永井真理子、角松敏生の歌が流れるドラマを見ることができます。) こんな歌詞の部分です。「夢でもし逢えたら 素敵なことね。あなたに逢えるまで 眠り続けたい。」ほくもあなたにというか、好きな女性に逢えるまで眠り続けたいです。好きな女性の夢の中に侵入して妖しいことをしたいです。さて、今日は幻影と蠱惑の時間を共にしてくださり、どうもありがとうございました。終わります。

(2007年3月24日誕生日、脱稿)

※ (以上は、福岡大学エクステンション・センター主催市民カレッジで話をするために準備した文章であり、聴衆に向かって話すことを念頭においた文体、口調のままである。ただし、断っておかなければならないが、原稿完成の現時点ではまだ、講座は行われていない。つまり、これは受講者の耳が聞き取る(喜び歓迎してくれるのを願っているけれど)ことになる前の言葉の集合体であり、これがそのまま話されることになるかどうかは、筆者の桑原にも分からない。ゴーチエは登場人物クラリモンドとロミュアルドをヴェネチアに旅させた。まるで、彼自身が実際、後にマテイ嬢とイタリアの旅を享受する未来を作品の中で先取りしていたかのように。私の文章もまた、その発表や省略や即興の追加変更は、やって来るであろう未来の領域に属している。

ドラキュラ映画論の執筆を計画していた。それに取りかかる前の試行錯誤の最中、文学講座の依頼が舞い込んだ。クラリモンドがロミュアルドの夢と現実の中に不意に入り込み心を捉えるように、即座にゴーチエの『恋する死女』が僕の心を捉えた。この作品が自らを候補作品として選ぶことを要請しているように思えた。それまで吸血鬼小説を色々読み、ドラキュラ映画を色々見ていたせいか、恐ろしくも妖艶な夢にいつまでも囚われの身になっているかのようなようだった。ここに文章化する機会を得たことで少しは解放感を覚えている。しかし、当初の計画が果たされない限り、完全な解放感を感じることはない。）

